

論文課題：私の研究の立場から見たグローバリゼーション

「地域に根ざした暮らしの視点 - ラムヌン運河の住民たち - 」

B0463009 中村真珠

(外国語学研究科・地域研究専攻)

要約：

現在、グローバリゼーションはさまざまな捉え方がされている。私たちは地球規模で考え行動することも可能になった。私も日常生活において、グローバリゼーションの恩恵を受けている一人である。しかし、ある視点からすると、必ずしも良い影響ばかりとは言えない。時にそれは、先進諸国の論理における<経済の自由化>を一方向的に押し付ける強い力となる。そしてその力が途上国社会の地域的な文脈に直されるとき、<開発>と名を変えて立ち現れるものだと私は考えている。工業化・都市化の急速な流れとも言い換えられる。その最大の特徴は、生活様式、文化や価値観において、一つのあり方を一方向的に押し付け、ものすごい速さで多様性を奪っていくという点である。

タイの首都バンコク郊外にある、小さなコミュニティーにも、その波は押し寄せている。現在バンコク首都圏内に建設中である新国際空港開港に向け、周辺の<開発>が進められる中、当該地の地価は高騰した。土地所有権を持たないこのコミュニティーの住民たちは、商業的開発を望む土地所有者らにより立ち退きを命ぜられる。区や警察などからの度重なる警告や脅しがあるが、経済力のない住民たちは他所への移住は不可能であった。結局、3名の住民が逮捕された。それを機にバラバラであった住民たちが結束し、NGOなどの協力を得、土地所有者との交渉に挑んだ。結果、土地所有者より土地の一部を安値で売却してもらい、コミュニティー全体でその土地を所有するという解決を見せた。この方法によって、立ち退きという居住の不安定要素は回避できた。しかしその後、転売された隣接地の新しい所有者である民間開発業者により、コミュニティーは再び土地買収を迫られている。

このコミュニティーの事例は、グローバリゼーションの影響を受ける多くの地域のうちの小さな一例である。しかし、低所得者層という社会的弱者でありながらも、背後にグローバリゼーションとの繋がりを持つ<開発>の流れに押しつぶされぬように踏みとどまっていることは注目に値する。ラムヌン運河コミュニティーでは確実に、一様の消費主義的生活様式とは異なる、地域に根ざし、そこにある自然環境を活かした生活を営んでいる。

I. はじめに

私は本学地域研究専攻において、タイ国バンコク都における、ある小さな低所得者層コミュニティの暮らしについて研究している。タイという国は、1997年のアジア通貨危機によって社会的、経済的にも大打撃を受けたが、その後、目覚ましい回復を見せた。経済危機後の経済成長率は年々右上がり、2004年には6.1%を記録している¹。

現在、バンコク中心部より東方32km、タイ中部サムットプラカーン県に「スワンナプーム国際空港」が建設されている。サムットプラカーン県は、「バンコク首都圏」として含められる隣接5県のうちのひとつである。この10年間のタイ周辺諸国における国際空港の規模拡大化・新空港開港をうけ、アジア地域のハブ空港としての競争に勝つためにも、スワンナプーム空港開港を国家の最優先政策としているという²。また、タイ国家経済社会開発庁（National Economic and Social Development Board）はこの空港周辺地域を「開発ポテンシャルの高い地域」として積極的に開発を進めようとしている³。

この空港は3200ヘクタールの敷地に2本の滑走路、世界一の高さとなる132mの管制塔を備えた、アジア最大規模となるものだ。施工はタイ大手の開発業者、Italian-Thai Developmentと日本の開発業者竹中・大林共同企業体である。そして、出資額の58.4%は国際協力銀行（JBIC）によるものである。

グローバリゼーションとは「産業や金融の多国籍企業の産物」であり、「地球上のあらゆる地域におけるすべての人々が」「信奉者として」巻き込まれる「競争」である⁴とするならば、この新国際空港建設も、まさにグローバリゼーションの象徴とも言える存在だ。グローバリゼーションとは、先進諸国（もしくは企業）の論理において＜経済の自由化＞を一方向的に押し付ける強い力である。そして、その力が途上国社会の地域的な文脈に直される時、＜開発＞と名を変えて立ち現れるものだと私は考えている。つまり＜開発＞と呼ばれるものも、世界的な競争の場が背景として直接つながっているものである。

そして、この動きはまさに「すべての人々」に影響を与えてしまう。私の研究対象地で

¹ タイの経済成長率（Asian Development Outlook [2000],[2005]より作成）

1997年	1998年	1999年	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年
-1.8	-10.4	4.1	4.8	2.2	5.3	6.9	6.1

²スワンナプーム国際空港

<http://www.suvarnabphumiairport.com>（閲覧日 2005年10月8日）

竹中工務店「タイのスワンナプーム国際空港旅客ターミナルビル新築工事を受注」

http://www.takenaka.co.jp/news.pr0111/m0111_02.html（閲覧日 2005年10月8日）

パシフィック・インターナショナル・コンサルタンツ「スワンナプーム国際空港建設プロジェクト」

http://www.pacific.co.jp/recruit/p_files/03.pdf（閲覧日 2005年10月8日）

³ 国際協力機構「タイ国バンコク首都圏庁副都心プログラム実施調査」（閲覧日 2005年10月10日）

http://www.jica.go.jp/evaluation/before/2004/tha_02.html

⁴樋口陽一・石渡茂編[2000]「グローバリゼーション 光と影」スーザン・ジョージ『グローバリゼーション 光と影』サンパウロ。

あるコミュニティーは、新国際空港から北西へ約 20 キロ離れた、バンコク都カナヤーオ区にある[地図 1]。空港開港に向け、周辺の〈開発〉が進み、地価が高騰している。

私はここに、2003 年 10 月から通い始め、2005 年 10 月現在までの状況の変化を記録している。これは、グローバリゼーションの影響を受ける多くの地域のうちの小さな一例でしかない。しかし、低所得者ながらもその強い影響にいかにも屈さず地道な生活を営んでいるのかを描き出すことは、他の事例にはない意義があるはずだ。本論文では、この小さなコミュニティーというある一点からの視点で、グローバリゼーションとは何かを論じたい。

II. バンコク市郊外にあるラムヌン運河コミュニティー

周辺地区の概要とラムヌン運河コミュニティーの歩み

カナヤーオ区は、バンコク中心地から北東およそ 30 km に位置する、1997 年に誕生した行政区である。2005 年現在、人口 84,961 人、面積 25.980k m²、人口密度 3,178 人/k m²の小さな区である⁵。ここは、20 年ほど前までは農業用保全地区であった⁶。カナヤーオ区を走る主要道路であるラーマイントラ通り、通称“10km”地点に、ある一つのコミュニティーがある。ここはラムヌン運河沿いに存在しているため、ラムヌン運河コミュニティー（以下、L コミュニティー）と呼ばれた。L コミュニティーには、1980 年頃から、北部や東北部などからバンコクへ出てきた労働者たちが住み込み始めた。当初この周辺地区はほとんど開発されておらず、この土地も「まるで森のよう」であった⁷。そして、土地所有権などは持たぬこの人々は、この空き地が「国のものだと思って⁸」、言わば勝手に住み込んだのである。しかし、実際は国有地ではなく、私有地であった。

住民の多くが付近の工場での労働や、果物売りなどの露天商や、警備員、清掃サービスなどに従事した。平均的な月収は 10,000 バーツに満たなかった。しかし、それでも出身地であるナコンサワンやチョンブリー、ガンペンベツなどにおける賃金よりかは高収入を得ることができた。そして地元に残っていた親戚や友人らを呼び寄せ、このコミュニティーの人口は多い時で 100 世帯近くまでに増加した。

1996 年、道路を挟んだ向いに、大型ショッピングモール Fashion Island が進出した。このモールには、BicC、Robinson、Tops、HomePro、Power Center、Fitness First などの大手チェーン企業が入っている。1980 年前までは辺鄙な郊外でしかなかったこの区にも、都市拡大現象が及び、農業用地は商業用地として開発されていった。

1997 年、土地所有者により、住民に 15 日以内の立ち退きを命じる文書が出された。土地所有者、区役所、警察などによる再三の警告にも関わらず、経済力のない住民たちは他所へ移住することなどは不可能であった。立ち退きに伴い家屋を取り壊す費用や、他所へ

⁵ *Khet Khanayao, Komun Khet Khanayao* [カナヤーオ区の情報 年次不詳]

⁶ 重富真一「土地開発と土地利用規制制度」(田坂：1998；123 頁)。

⁷ 2003 年 10 月、住民の語りによる。

⁸ 同上。

の交通費、新たに家屋を再建する費用などはなかったのである。すぐに立ち退く者に関しては、土地所有者が補償金として 5000B 出すということであった。しかし、住民の多くには、その金だけでは新しい土地で生活を再出発させることは難しいことが見えていた。結局、49 世帯が留まることとなった。

2000 年 5 月 23 日、ついに住民 3 名が逮捕されるという事件が起きた。「許可なく建築し命令に背き取り壊さなかった」という罪である。これを機に、バラバラであった住民たちが結束した。当時のことを振り返るある住民は、「誰が助けてくれるのかも分からないし、助けてくれる人がいるのかも分からなかった」と語った。どこから噂を聞きつけてか、バンコク都内にある多くの運河沿いのコミュニティーネットワークの人間が L コミュニティーに入ってきた。立場が似ている住民同士であるので、自分たちの経験を分かち合い、L コミュニティーの住民たちが何をすべきなのか、土地所有者との交渉を始めるためにはどのような準備が必要かを助言した。彼らは貯蓄活動を始めることを提案するが、その日暮らに近い経済状況にいた L コミュニティーの住民たちは、「チョク？チョクなんて聞いたこともないよ。やったことがないから分からん！⁹」という反応であった。こうした段階から、住民が納得できるように説明を重ね、L コミュニティーは 2 年間貯蓄活動を行なった。そしてついには、貯めた資金をもとに住宅組合を結成し、2002 年 1 月 18 日、「ラムヌン運河コミュニティー住宅組合」として公的に登録したのである。こうして公的な存在となり、組合の持つ資金を元本にタイ公共機関から低金利融資を受けた。そして、交渉を重ねた上で、土地所有者から一部の土地を低額で購入した。

こうして、立ち退きという居住の不安定要素は回避された。しかし、ここで話は終わらなかった。2001 年、コミュニティーの隣接地は転売され、民間開発業者の手に渡った。この会社は現在、新国際空港からのアクセスを期待して、遊園地とホテルを建設中である。L コミュニティーはちょうど遊園地とホテルの間に挟まれることとなった。この開発業者は、コミュニティー住民に、住民の家屋 1 軒につき 1,500,000B で買収する話を持ちかけた。この額の大きさに、大きく揺れた住民もいた。しかし、話し合いの末、住民たちは断固として売却しない、という意見でまとまった。理由として、「お金をもらいここを出たとして、他にどこに行くというのか。行く場所なんて、ない。」「自分たちが闘い、勝ち取ってきた土地だ。ここで売っては、何のためにここまできたのか分からない」「もし売ってお金を手にしたとしても、それで終わりさ。でもここは、みんなで一緒に何かをやる、っていう活動があるからね。お金よりもずっといいよ。」

住民たちのこうした考え方と行動からは、「お金だけではない」価値観が強く見受けられる。周辺の強い圧力に負けることなく、その場に存在し続けることでささやかな抵抗であると見ることもできる。

⁹ 同上。

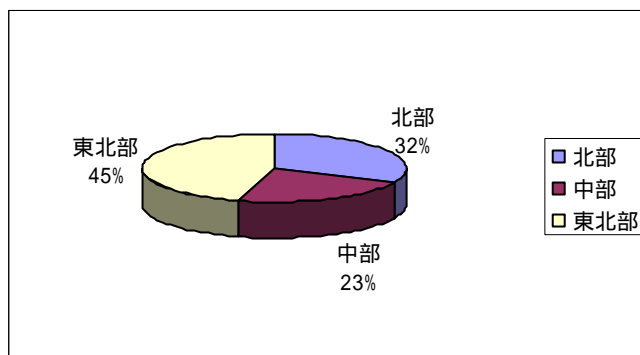
ラムヌン運河コミュニティーの住民たち

2005 年現在、このコミュニティーには 49 世帯が居住している。住民のほとんどが、およそ 20 年前に他県から流入してきた農村出身者である(北部 32%、中部 23%、東北部 45% 下図参照)。

北部		
1	ランパーン	1
2	スコータイ	1
3	ナコンサワン	9
4	ペチャブーン	1
5	ガンペンペット	2
合計		14

中部		
1	ナコンパトム	2
2	バンコク	2
3	チョンブリー	3
4	トラート	1
5	アユタヤ	1
6	サラブリー	1
合計		10

東北部		
1	ブリラム	5
2	ノンカーイ	4
3	シーサケット	1
4	スリン	1
5	チャイヤブーム	2
6	カラシン	1
7	ウボンラーチャタニー	2
8	ウドンタニー	2
9	ナコンラーチャシマー	2
合計		20



(現地調査より筆者作成。[2005])

私がこのコミュニティーに通い続ける大きな要因は、ここに心通じ合う友人がいるからである。彼女の名前は、パーペーンと言う。年齢は 68 歳である。現在、96 歳の母親と 29 歳の末娘の 3 人で暮らしている。パーペーンはもともと、北部ナコンサワンで生まれ育った。小学 4 年生まで学校に通い、その後は農家である実家の農作業の手伝いをして働いていた。彼女は 12 人キョウダイの長女である。25 歳頃、隣県ピットからやってきたソムチット氏と知り合う。お互いに好きになったが、パーペーンいわく、「すぐに承諾するのは女として好ましくない」ので、2 年後に結婚することになった。伝統的な「男が女のところに来る」という形式で、ソムチット氏がパーペーンの住むナコンサワンに来て結婚の儀式を

行なった。実家の側に家を建て、二人で農業を営んだ。その後、7人の子どもを授かるが、末娘のトゥックが3ヶ月の時、夫は38歳で亡くなった。以来、パーペーンは女手一人で7人の子どもたちを育てあげてきた。うち2人を亡くし、現在長女(41)はカンチャナブリ、次男(35)はナコンサワン、次女(34)はハジャイ、三女(32)はカンチャナブリ、末娘(29)はパーペーンと共に暮らしている。

パーペーンは1984年頃にこのLコミュニティへ移住してきた。バンコクへ出てきた理由は、「こどもたちが農業ができないから」「働くところを探して」であった。このコミュニティに住み込んだのは、もともと、妹であるパーチャン(49)がこの土地の第一人者として住んでいたからである。末娘のトゥックともう一人の妹であるパーノイ(50)の家族と共に、バスに3時間揺られて出てきた。トゥックとパーノイ夫妻は、ブロック作りの工場で働いた。

パーペーンの家族には男性がいない。家族の大黒柱は、末娘のトゥックである。高等専門学校を卒業した彼女は、現在は近くのゴルフ場の飲食店で売り子をしている。文字通り週末も休みなく毎日働き、月々の月収は約7000Bである。朝7時には家を出て、帰宅するのは22時近くだ。653Bの土地代と、1200Bの住宅代の借金を毎月返済しなくてはならない。そして食費、電気代、水道代に、交通費やその他雑費を支払うと、トゥック一人の給料ではぎりぎりの生活である。2005年6月から始めた貯蓄組合のためにも、毎日10Bを貯蓄しなくてはならない¹⁰。彼女自身は収入がない。トゥックの収入も、足りないくらいだ。貯蓄活動はいかにして可能なのだろうか。そこで、彼女の行動からそれが分かるように、ここに彼女の生活の一幕を記述した2005年9月のフィールドメモを引用する。

「パーペーンの朝は早い。5時頃に起き、水浴びをし、顔や首周りや胴体に白いパウダーを塗る。服を着たら、キンマ¹¹をかむ。朝食の前に、コミュニティの裏に植えているインゲンや空芯菜などの野菜を収穫しに行く。収穫がよければ、それぞれ洗って束にしてまとめておく。コミュニティ内の必要な人に売る。大体、インゲンや空芯菜は一束5B~10B程度である。時にはバナナの葉を収穫し、丸めて束しておく。これもコミュニティ内で売る。大体5B~10B程度。それから朝食の仕度をし、96歳の母親と食べる。主に白米とパララー(魚を塩と炒りぬかで漬けて発酵させた調味料)に、生のインゲンや空芯菜、それに魚などが中心である。娘のトゥックは、6時に起床し水浴びが済むと、朝食も食べずに仕事に出かける。パーペーンと彼女の母親は、食事が済むと再びキンマを噛む。そうこうしているうちに、コミュニティの住民が入ってきてパーペーンに服の修繕を頼みにや

¹⁰毎日10B...9Bは蓄積され、1Bはコミュニティ福祉用として蓄積される。

¹¹「ピンロウジを薄く切り、赤く染めた石灰を塗ったキンマの葉に包んでかむことをキンマと言う。強い刺激と麻酔的な清涼嗜好品として東南アジアでは古来広く常用されてきた。これを噛むと口内が真っ赤になり歯が黒くなる。」「非現代的であるとの見地から、第二次世界大戦中にピブーン政権はこの使用と栽培をやめるよう国民に勧告した。現在タイではこれを常用する人は非常に少ない」(富田竹二郎編[1997]『タイ日大辞典』めこん)。

ってくる。パーペーンは裁縫が得意である。足踏みミシンを使い、ほつれたジーンズ、ズボンのすそ上げ、かばんの取って直し、ファスナーの修繕など、依頼があればきちんと行なう。そして頼んだ住民は、一件につき 20~25B をパーペーンに支払う。裁縫の依頼がない日には、パーペーンは決まって魚釣りに出かける。青と赤の二本の竹竿、前日に捕獲していた沢蟹を入れたバケツを持ち、カーキ色の帽子をかぶって行く。肩にかけたタイ式のかばんには、包丁、冷蔵庫で冷やしておいた水のペットボトル（もちろん再利用である）とキンマのセット、嗅ぎタバコ用の粉と U 字型の細い管が入っている。運河沿いに歩き、よい水のたまり場があれば、その木や草の多い茂る中に身を置いて何時間と座り続ける魚を行なう。

手順は以下の通りである。バケツの中に入れてきた沢蟹を一匹つかみ、がばっと甲羅をはずす。その手さばきは、ほんの一瞬である。当の蟹も、我が身に何が起きたか把握できぬほどの速さである。はずされた甲羅の内側では、ウニ色の内臓が痙攣している。一方、甲羅をはずされた状態の蟹は、致命的ダメージを受けた様子で、足を引きつらせて動かしている。そんな蟹の様子に気をとられることもなく、パーペーンはさっさと蟹の足をもぎとる。一本もぐと、まわりの硬い皮を割り、やわらかくてとろとろしている中身を出す。それを釣り針にちょうど曲がるように通し入れて、たまり場の奥の方へ竿を投げる。もう一方の竿も、同じように行なう。こうして二本の竿を代わる代わる上げ、魚を釣る。甲羅の内側のウニ色のものも刺す。まだ足をわずかに動かしている蟹を、容赦なく包丁で半分につった切る。そして真中の部分の白い身を取りだし、釣り針につける。竿を投げては、待つ。待つこと数分。高齢とは思えぬほどの驚くべき速さで竿をあげる。小さな魚が上がる。釣れない間も、ただただしゃがんで待っている。赤と青の浮きを見つめている。ときおり、かばんの中からキンマのセットを取り出して、もぐもぐと噛んでいる。こうして、一日に多い時では 10 匹~20 匹の小さな魚が釣れる。これらをコミュニティ内で売る。」

年配の女性たちは、住み込み始めた当初から、この地の自然環境を活かして生活を営んできた。たとえば、それまでの農村での暮らしとそう変わらぬ生活をしてきた。バンコク市郊外といえども、20 年前まではそれが十分にできる環境であった。L コミュニティーは、つい昨年の 2004 年まではここでコメをつくっていた。しかし、2004 年秋、収穫を前にしてこの稲は根こそぎ倒されてしまった。遊園地を建設中の業者が、「盛り土をするのは収穫まで待つてほしい」と請願に来た老婆の声を無視し、ブルドーザーで踏みつぶしてしまったのだ。結局、住民たちは今後、コメを購入しなくてはならなくなった。

住民は、限られた土地においてできるだけ農作物を育てている。バナナ、パイナップル、マンゴーなどの木はもちろん、レモングラス、バジル、インゲン、空芯菜、のほか、観賞用の花も植えている。

以上に見てきた L コミュニティーの住民たちは、周辺の〈開発〉による大きな圧力にも

屈さず、限られた（許された）スペースにおいて、できるだけ地域に根ざした生活を営んでいる。現在、地球上のあらゆる場所において、背後にグローバリゼーションが繋がっている<開発>の波が、こうした生活環境や文化を飲み込んでいることは否めない。

III. 結論 「わたしの研究の立場から見たグローバリゼーション」

グローバリゼーションには光と影がある。本論文は極端に偏った一部分の視点かもしれない。もちろん私もこの時代においてグローバリゼーションの恩恵を受けている人間である。しかし、あえて影の部分をも自分なりに表現してみたかった。グローバリゼーションとは、生活様式、文化や価値観において、ある一つのあり方 - 主に西欧のもの - を一方的に押し付ける動きである。ラムヌン運河コミュニティは、まさにこの波に飲まれようとしていた。民間開発業者によって建設中の遊園地とホテルの建つ土地の狭間にあり、存在し続けることがささやかな抵抗になっているように思えてならない。ここで売却してしまえば、この地区一帯はまるで他のどこかと同じ 大型ショッピングモールにホテル、レジャー施設という組み合わせ 風景となる。そして、こうした地区が一つ増えれば、彼らの論理に賛同の一票を増したことのように見えてしまう。その流れを変えていくためには、彼らの金の論理に飲まれるのではなく、そうではない在り方を存在によって提示する。例えば、1,500,000B という額を提示されても、土地を売却することを選ばなかったこのコミュニティの決断のように、である。「資本力だけがモノを言う時代」とも言われ、この言葉を裏付けるような事象も多々起きている。しかし、度々繰り返しているように、消費主義的生活様式のような、価値観や生活様式、文化においてある一つのあり方しか認めようとしないこの流れは、とても危険である。それに対抗するために、今まで自然環境と共に生活を営んできた暮らしの流儀を、私たちは実践していかなければならない時代ではないか。

参考文献

- 大阪市立大学経済研究所編 [1989] 『アジアの大都市 バンコク、クアラルンプル、シンガポール、ジャカルタ』東京大学出版会。
- 富田竹二郎編 [1997] 『タイ日大辞典』めこん。
- 田坂敏雄編 [1998] 『アジアの大都市[1] バンコク』日本評論社。
- 西川潤・野田真里編 [2001] 『仏教・開発・NGO』新評論。
- 樋口陽一・石渡茂編 [2000] 『グローバリゼーション 光と影』、サンパウロ。
- Asian Development Bank [2000] Asian Development Outlook 2000.
- Asian Development Bank [2005] Asian Development Outlook 2005.
- Khet Khanayao, Komun Khet Khanayao* [カナヤーオ区の情報 年次不詳]